



世界共通の課題へ 美大はどう向き合うか

「gender equality (対等なジェンダー)」

昨年、TOKYO 2020 オリンピックが開催されましたが、このオリンピックでは3つある大会ビジョンの1つが「多様性と調和」でした。皆が違いを肯定し、自然に受け入れ、互いに認め合うことで社会は進歩するというコンセプトです。その中でも「ジェンダー平等」は推進チームを立ち上げるなど、特に力を入れていた様に思います。なお、2015年に国連が採択したSDGsでも「ジェンダー平等」は達成すべき目標の1つに掲げられています。

多摩美術大学のグラフィックデザイン学科では各国に共通する社会問題をテーマに隔年でポスター展を行っています。2019年末にはオーストリア、中国、そして日本の3ヵ国でほぼ同時に開催しました。テーマは「gender equality (対等なジェンダー)」このポスター展について多摩美術大学へお伺いし、インタビューさせていただきました。

多摩美術大学

グラフィックデザイン学科が社会問題をテーマに、 東京－ウィーン－杭州で学生交流ポスター展を同時開催

2019年12月3日～21日、八王子キャンパスのアートテーク1階ギャラリーで、学生交流ポスター展「ASIA + EUROPA student exchange exhibition」が行われました。この取り組みはグラフィックデザイン学科とオーストリアのウィーン応用美術大学との学学連携で、2015年から隔年で実施しているものです。3回目の開催となった今回は中国・杭州の中国美術学院が新たに加わり、各校の学生計101名がSDGsでも注目されている「gender equality（対等なジェンダー）」をテーマにポスターを制作。作品データを共有してそれぞれ現地で出力し、3カ国でほぼ同時に展覧会を開催しました。

海外の大学との交流を通じて、 グラフィックデザインにおける文化的差異を見出す

学生ポスター交流展は、学生の視野拡大と発想力の強化を図り、国際的に活躍するデザイナーを育成することを目的とする取り組みです。日本文化に高い関心をもつウィーン応用美術大学のスヴェン・イングマー・ティース先生からの呼びかけに、企業デザイナーとして国内外のアートディレクションを数多く担当し、海外駐在の経験もある山形季央教授が呼応。2019年度からは中国美術学院の学生も加わりました。

「文化の差異によるグラフィックデザインへの影響を、人や地域と触れ合うフィールドワークから読み取り、これからのデザインのあるべき姿を顕在化させたいという思いがありました。同じテーマ、同じメディア、同じ作品サイズで統一して制作した方が、より顕著に差異を見出せます。展覧会の行いやすさ、学生の取り組みやすさなども考えてポスター制作としました」（山形教授）



2019年度のテーマは「gender equality（対等なジェンダー）」 SDGsにも採択された国際社会共通の問題を考える

学生交流ポスター展のテーマは教員間で協議し、各国に共通する社会問題を取り上げています。今回のテーマは「gender equality（対等なジェンダー）」。国連が2015年に採択したSDGs（持続可能な開発目標）でも「ジェンダー平等の実現」は達成すべき目標のひとつに掲げられており、国際社会共通の重要な問題です。

「社会には常にさまざまな問題が横たわっていますが、デザインはそれを解決する一翼を担うべきだと考えています。テーマ決定後は各校それぞれで制作指導が行われますが、私の授業では、まずはどんな問題があるのかを知り、学生一人ひとりが自分なりのアプローチで理解を深め、自分自身の意見を構築するところからはじめました」（山形教授）

制作過程では各国間の学生同士で利用可能な SNS が設けられ、学生たちは英語で自由な意見交換を行いながらポスター制作を進めました。また、中国から成朝暉教授と学生たちが、ウィーンからティース先生が来日し、ワークショップやシンポジウムが行われるなど直接交流をする機会もありました。

デジタル技術の発達で、展覧会の3カ国同時開催が可能に

ポスターは200年以上の歴史がある古いメディアですが、近年のデジタル技術の発達により作品データを Web 上で共有できるようになりました。各校がそのデータを現地でそれぞれ出力し、今回、この学生交流ポスター展の取り組みでは初めてとなる3カ国同時開催を実現しました。

「観客に『gender equality (対等なジェンダー)』という社会問題について考えてもらう機会を、東京とウィーン、杭州で、同時に、同じ展示設計で提供する。この展覧会自体がインスタレーション(※)であるといえます」(山形教授)



「ASIA + EUROPA student exchange exhibition」図録。左から日本語版(多摩美術大学制作)、英語版(ウィーン応用美術大学制作)、中国語版(中国美術学院制作)

学生たちの作品を一堂に集めることで見えたもの

展示スペースは各校ごとに分かれており、順を追って鑑賞していくと、その表現の差異が顕著に感じられます。

「一概には言えませんが、論理的アプローチをする人が多いのがヨーロッパ、感覚的アプローチをする人が多いのが日本。表現も、文字を主体にしたモダンデザインが多いのがヨーロッパ、絵を主体にしたデザインが多いのが日本という傾向があります」(山形教授)

同じアジアでも中国の学生は「書道」を取り入れたデザインが多く、日本に比べるとロジカルで、アメリカのデザインに近い傾向であるとのこと。

「グラフィックデザインはコミュニケーションを目的としたアートです。育った国や地域の文化、環境などが異なれば、当然、伝えたいことも伝え方も異なります。多文化交流から生まれる共感と違和感は、互いにとって良い刺激となったはず。互いの考え方や心の在りようを知り、理解を深め合うことで、デザインの幅はさらに広がります。世界を知ることの利点はまさにこの点にある」(山形教授)

また、この取り組みを長く続けていけば、時系列の違いからも世界の変化を互いに感じることができるようになります。作品やシンポジウム、ワークショップ、展覧会の記録をすべてアーカイブしておくことで、それ自体が時代の証言にもなるという考えから、本展覧会の成果として各大学がまとめた3言語からなる図録も制作されました。表紙のデザインはウィーン応用美術大学の学生によるものです。ビジュアルを統一することで本展覧会が3校による共創であることを表現しています。中のページは3校それぞれの学生がデザインしました。

※本記事は2020年3月に掲載されたものです。

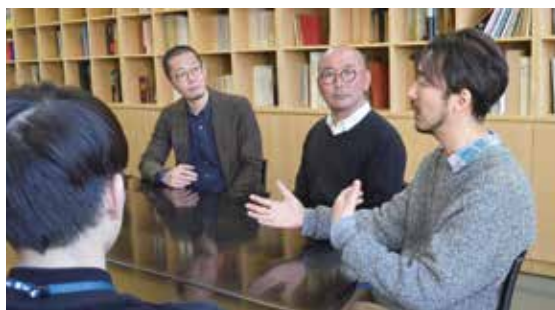
——『対等なジェンダー』という社会問題をテーマに行われたポスター展をとっても興味深く拝見いたしました。また海外の学生らと同時開催という形で実施されたことにも時代性を感じました。

まず最初に、今は社会問題に対し敏感な若者が増えているように感じます。トーリンには、美大に行きたいという生徒さんが沢山来ています。絵が好きで、とにかく手を動かすことが大好きという彼らの中に、社会問題を解決するという思いで美大を選ぶ学生さんがいても面白いと思いました。

加藤准教授 学生たちを見ていても普段の制作から社会問題をストリートにテーマにする作品も増えてきています。やはりTVやSNSからニュースなどを見て興味を持つのだと思います。10年前からこういった問題を扱うことは当たり前になってきましたね。特にグラフィックデザイン学科では課題を自由にしているという事で、自分でテーマを導き出すことになりました。社会問題をテーマにしたいという事は指導側がどうこう言う事ではなく、若者が社会を見ながら自分でみな自然に出てきていると感じます。多摩美は自由という事をスローガンにしていますけど、その自由の中で自然にそういう問題を疑問視したりテーマにしたりという学生がいるのだと思います。

美大という、「どんな人がいても受け入れる」という環境も、こういう問題をストリートに発言できることはあります。高校まではなかなか言い辛いこともあるのではないかと思いますね。

——しっかりした社会貢献活動をしている企業かどうか。その貢献度で企業を見るような学生が増えてる印象がありますね。そこから今のSDGsが叫ばれたり、デザイン志向というものが出てきたり、昔は大人が考えるものだったものが、若い人たちも参加する社会になってきている感じがしますね。テーマに対して社会背景は関係しましたか。



多摩美術大学

グラフィックデザイン学科
准教授 加藤 勝也 氏

助手 鳥山 耀太 氏
助手 石井 慎一 郎 氏

スペシャル
インタビュー

トーリン美術予備校

学長 瀬尾 治

学長補佐 佐々木 庸浩

加藤准教授 参加する女性の発言やリーダーシップはありましたね。作品に関しては男女というよりは国の違いが出てきていたというのが面白かったです。

日本の学生はイラストからの展開が強く、ヨーロッパはデータグラフィックスのような展開ですかね。最近特に日本はマンガ、イラストレーションの影響が強く感じます。

鳥山助手 僕が学生だった当時参加した15年、「高齢化」がテーマの時に感じたことは、ヨーロッパ側はデータを根拠にするなど、客観的に捉えた作品が多く、対して日本側の作品ではイメージや感情などの表現をメインに扱っていたことで、その差が印象的でした。

——15年、17年、19年とその傾向は違いませんか。

加藤准教授 大きく違いはありませんが19年になると、ウィーンの作品に表現的な作品が増えてきている印象を受けます。互いに影響し合う部分かもしれません。

世界でも影響し合うでしょうし、国内の大学同士で例えばムサビと多摩美でやっても違いは出るでしょうね。大学の色もそうですしお国柄も違いますから、違いは自然に出るんでしょうね。しかし昔やっていたらもっと違かったかもしれません。今はSNSなどで同じようなものを見る機会が増えていますから。中国のデザインにもそれぞれ過去とは違った印象を感じます。全体では影響し合ってきている印象でこの企画の融合を感じますね。

多摩美は女性の方が多のですが、作品を見ていても作品を作るにあたって男性が作る作品と女性が作る作品にも違いがあるようですし、それぞれの育った環境や地域でも考え方は違うのかなと。テーマを自分に置き換えて作る人もいれば、周りに置き換えて作る人もいるわけですね。この課題に限らず、留学生の中にも自分の育った環境や文化を、そうした目線とらえている学生がいますね。意外とその環境で受けたストレスを表現するような作品も目にします。

——最近出たジェンダーギャップ指数をみてもジェンダーの問題においてはまだまだアジア圏の意識改革は必要そうですね。それでも今こういう問題を考えた若い学生さんたちが社会に出たときいい反応が出るという事ですよ。

加藤准教授 はいそうですね。そういう反応に期待したいですね。そのためにもツケを残さず若者たちが自由に作品作りをできる環境づくりを心がけていくことが大事だなと。

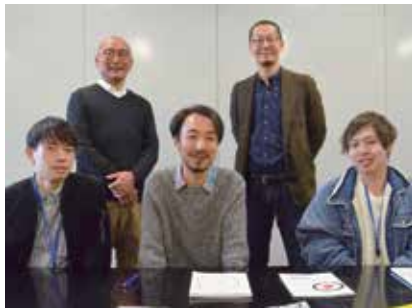
——学生生活の中でいろんな形で海外のアーティストや様々な団体と交流を持つと思うのですが、これが一番最初の良い交流になる方もいらっしゃるのかと思います。

加藤准教授 そうですね。SNSの交流もされていたのかな？

鳥山助手 1回目の時から、双方の学生がFacebook上で交流しながら企画が進んでいきました。当時のテーマは「高齢化」でして、「将来の人口比率の問題」または「自分が年をとった時の社会生活」、このいずれかをテーマに選択した上で、解決策提案



今回参加して下さった助手の鳥山さんが第一回のポスター展で「老い」をテーマに出品した作品。時間を積み重ねた美しさがあるというメッセージ。



前列左より
鳥山助手, 加藤准教授, 石井助手
後列左より
瀬尾, 佐々木

助手の鳥山さんは
トーリンの卒業生でした。



会場でのプレゼンテーションの様子。

を示す、または分析を示すという課題でした。双方の学生が自国で制作し、来日後に多摩美にて合同で展示し、英語でプレゼンし合うという事を行いました。

加藤准教授 やはり両国で同時開催しているという事がこの展示の趣旨となります。そのため、作品データを両国間で相互にやりとりする必要がありました。展示の準備では、ウィーン側でも日本側でも、交換したデータをそれぞれ現地で出力し合うことで、両国で同じ作品を揃えて展示することができました。この実現には大きさや仕様を揃えた共通企画を定め、お互いにまもって制作することが必要です。これが、展示作品をポスターに定形化している理由のひとつでもあります。

鳥山助手 ウィーンから皆さんがいらっしゃってプレゼンするという事で、会場作りをしたり、ウィーンから送られてきたデータを日本の学生みんなで出力したりという事をしました。

外国の学生の作品を出力し、直に手に取るという事が印象的でした。まだ来日されていない状況で、これから会う人の作品を出力しながら、どういったことが表現されているのか、自分達と比べてどんな考え方の違いがあるのかということを感じながら出力作業をしたことが思い出されます。

加藤准教授 それで2回目は社会問題という前提で、学生たちがディスカッションしてテーマを決めたとのことでした。より学生たちに交流をさせていきたいという事でブラッシュアップしていったと前任の山形先生(※)から聞いています。

——次回はどのようになりますか。

加藤准教授 コロナの影響によるところが大きいですね。22年に開催できるか、23年になるかという状況です。

(※) 第一回～第三回の担当は山形季央教授でした。

●インタビューは21年12月15日、多摩美術大学・八王子キャンパス内にて、コロナ感染対策を十分にとった上で実施。